

【寄稿】留学&ゼミ

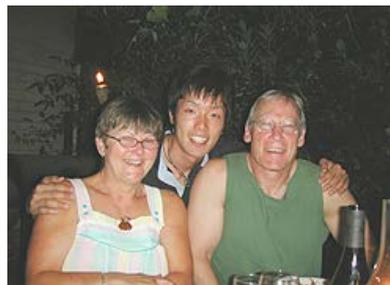
研修体験記

異文化を知って日本を知る——2006年度長期交換留学生と中期留学生の留学体験記、佐竹弘靖・教養ゼミ生による中東シリア・ルポをお届けしよう。

「意見を持つ」大切さ知る

— 米・オレゴン大学 森 隼人(経済4)

アメリカのユージーンという町の大自然の中に、オレゴン大学があります。人々はとてもフレンドリーで、毎朝バスの運転手に「HAVE A GOOD DAY」と言葉を交わされた日々を思い出しています。



▲フレンドリーな米国人に囲まれた笑顔の森さん

新たな環境での留学生活は毎日挑戦の日々。とても刺激的で充実感がありました。ミスや失敗を恐れず、チャレンジし努力し頑張ることで、自分の未熟さにも気づくことができ、学業面だけでなく人間的にも成長したと思います。

現地の授業では、聞くだけでなく、自分の意見を持つことが重視されます。さまざまな国の人々と出会い、多種多様な考えや意見を聞き、交換していく中で自分自身の考え方に柔軟性や多様性が得られたと思います。英語力の向上はもちろんのこと、コミュニケーション能力の大切さを日々、再認識しました。

大学での勉学を通じて現地でしか得られない知識や経験は私のこれからの人生・将来にとって大きな財産になると確信しています。

この留学に満足することなく、留学の経験を生かし、今後も成長するために努力していきたいと思います。

(06年度長期交換留学生)

多彩なキャンパス生活を満喫

— 韓国・檀国大学 光武真衣(経営4)

今回の留学は、私にとって人生で最も素晴らしい経験で、大きく成長できたと思います。

長期交換留学は、短期留学とは違い、現地の大学で専門科目を学ぶことが目的なので、私は10カ月間、現地の学生と一緒に経営学を学びました。外国人が現地の学生と同じ授業に出席し、試験を受けるというのは大変なことでしたが、日本には絶対にできないことなので、本当に貴重な経験をさせていただきました。

また、サークル活動や、ボランティア活動にも参加したので、友達も多く、毎日の学校生活が楽しみでした。「ワールドカップ」の時は、一緒に赤いTシャツを着て応援し、文化祭では一晩中語り合い、休日は友達同士で旅行にも行きました。私が住んでいた学生寮には、多くの交換留学生が生活していたため、世界各国の友達ができました。

この10カ月間は、これまでの人生の中で最も充実し、忘れられない思い出となりました。支援してくださった多くの方々、本当にありがとうございました。

(06年度長期交換留学生)

異国で自身を見つめ直した

— 米・ネブラスカ大学リンカーン校 藤本亜美(文3)

アメリカのネブラスカ大学に約4カ月間留学しました。

そこでの生活は本当に充実していました。朝8時半から午後2時半までみっちり英語の授業。宿題やテストも多く、日本では考えられない勉強量で、着実に英語力が上がっていることを実感しました。



▲各国の留学生と交流した藤本さん(中央)

放課後には、友達とサッカーやテニスをし、休日には買い物に行ったり映画を見に行ったりしました。ネブラスカには親切で優しい人が多く、どこでも気さくに話しかけてくれ、困っているときには親身になって助けてくれました。

また、私たちが生活していた寮には、アメリカ、イギリス、スペイン、メキシコ、韓国など、各国の人が暮らしていて、友達もたくさんできました。

この留学では、たくさんものを経験し得ることができました。英語力はもちろんですが、感謝の気持ちや異文化交流の難しさ、素晴らしさを知り、また自分自身を見つめ直すいい機会にもなりました。

留学で得たものを忘れずにいろいろなことに興味を持ち、積極的に取り組んでいこうと思います。

(06年度中期留学生・後期)

<佐竹弘靖・教養ゼミ シリア滞在記>

文明発祥の地シリア イスラムの文化巡る

—大信 建(経済3)

私たち佐竹弘靖ゼミ(教養ゼミナール)では、「シルクロードを歩く」をテーマに、シリアに着目し、1年間にわたって文化や風土などを調べてきた。そして、最終課題として3月4日から15日まで現地にフィールドワークに訪れた。

中東に位置するシリアは、イラク問題などで、今話題になっている国の一つ。国民の85%はアラブ人で、スンニ派が70%を占めるイスラム教の国だ。

シリアは、人類文明が最も早く芽生えた土地の一つとして知られ、紀元前2000年からアラビア半島、メソポタミア、地中海貿易の中心として、さらに、シルクロードの西端としての役割を果たしてきた。

日本にはほとんど馴染みのないイスラム教の国で、遺跡を巡ることや、現地の人々の話を聞くことでも、もちろん刺激を受けたし、感心することも多かった。

旅は、首都のダマスカスから北上し、シリアを一周するように進んだ。遺跡を巡るたびに「観光」というサービス業が目立った気がした。

幸運にも旅の最後に現地の学生と交流でき、ホームステイまでさせてもらった。これも、普通の旅行では決してできないことだし、現地の人々の生活を知る上で貴重な体験だった。

シリアは今からもっと発展していこう。何年後にもう一度訪れて、「変貌した」シリアを見てみたい。

ホームステイ体験で「信頼」の重み知る

—渡部 萌(経済4)

シリアの旅の最後に待ち受けていたものは、ダマスカス大学の学生との交流会とホームステイであった。個人的には一番楽しみにしていたものでもある。「自分の足で歩き、自分の肌で感じ、自分の目で見た」シリアに、「生の声を聞く」体験をプラスさせたい。この想いで大使館や国際交流基金と交渉を重ね、実現させたものだ。



▲ダマスカス大学生との交流会で

シリアの伝統的な料理を作って歓迎してくれた彼らと、スポーツやファッション、恋愛について語り合った。共感して盛り上がる一方で、宗教や政治的な話では軍事国家の色を強く感じた。夜にはシリアの家庭

を訪問するという貴重な経験を得た。家庭料理を筆頭に、流行の音楽、トイレの使用方法……何もかもが新鮮でカルチャーショックを受けた。

政治的な話では日本人としての意見を求められることも多かった。彼らとは今でも連絡を取り合っている。この「草の根」的なつながりを続けていきたいと強く思う。

以前はニュースやメディアを通じて身近に感じていた中東地域だが、実際に訪れてみて、思想や社会状況の実情を前に、逆に遠さを感じてしまった。その一方で、国境や文化を越えて「信頼」を生み出せたようにも思う。これは現地へ行ってこそ感じられたものであり、生み出したものである。

世界へ視野を広げ、自分の足で見知らぬ土地を歩いてみることは、自分自身の新しい価値創造につながっていくと実感した旅であった。